

李恢成の「祖国観」

—— 彼にとって〈国籍〉とは何か ——

申 礼 淑

はじめに

李恢成は1998年5月30日、韓国・翰林大学と東亜日報共催の国際シンポジウムの席上で「韓国国籍」を取得すると宣言した。それに先立って『月刊新潮』¹⁾の紙面を借り、国籍を変更する自分の立場を説明している。そこには、彼が韓国の国籍を取得する理由なるものとして次の四つをあげている。

- ①池明観教授との対談のあと、「国籍」を変更して南に自由に出入りしようと考えた。
- ②北朝鮮に帰国した三人の従兄弟の「政治犯」としての死。
- ③韓国の反体制運動をする人々と接触しているうち、「右」であれ「左」であれ、正しい主張をする者こそが正しいと思うようになった。
- ④金大中の政権が誕生し、「国民の政府」になり、「今では韓国がこの国の平和的統一のために大きな役割を担う時代に入ってきている」と思う。自分はこの時代のすべてを文学者として見届けたい。

つまり、時代と新たな状況の変化が彼に韓国国籍を取得する決心をさせたと述べている。

彼のこの発表を受けて、数少ない「朝鮮籍」者（これは北の朝鮮民主主義人民共和国の国籍を意味しているのではなく、朝鮮半島の「朝鮮」の意味であり、北にも南にも属さないという人々が持っている籍）の一人である金石範氏は『世界』の紙面を通して厳しい意見を投げかけている。

一読して手記は、国籍変更までの苦衷は察し得るものの、自己合理化、弁解であ

1) 李恢成「韓国国籍取得の記」（『月刊新潮』1998年6月号）

り、飾りが多い。なぜ、それほど弁解に力を尽くすのか。「〈亡命者〉とか〈無国籍者〉とかといって日本で安穩に暮らしているとすれば……」とか、「亡命者」、「無国籍者」という立場を離れて……などを書いていて、君は国籍変更を韓国の困難な状況に自ら身を投ずるためだとしているが、私から見るとそうではない。その反対というべきだろう²⁾。

と述べ、さらに李恢成のこのような行動は「分断ナショナリズム」で、「地方主義にまさる罪惡的な地方主義」だと批判している。即ち、金石範氏は李恢成が韓国の国籍を取得するのは、韓国の権力体制への一種の加担として理解している。そこには、李恢成の国籍変更を政治的な面から受け止めている節がある。勿論国籍の問題なので、政治色を一切持たないというのは有り得ないと思う。しかし、李恢成の作品を初期から読みつないで見ると、彼がこういう決心をしたのは、彼が今まで辿ってきた道のりから自ずと出された、彼なりの思想を背景にして選んだもの、という気がする。ここでは、李恢成の作品を読み、彼が祖国なるものをどのような立場で、どのように考えてきたのか、を検討し、どういう考えから、韓国国籍を取得する決心をしたのか、を追求してみたいと思う。

1. 朝鮮人としての父親

李恢成は在日二世である。終戦までは、半島から流れて来て、樺太に住み着いた両親の元で真岡で過ごしていた。朝鮮語が飛び交う中で、特別に自分達が朝鮮人であることを隠すこともなく、周りの人々も彼らが朝鮮人であることを知っている（「証人のいない光景」）状況で、少年時代を過ごしている。つまりこれは、彼自身、生まれてから物心付いたときには自然と自分自身は朝鮮人だという認識を持っていたことを意味する。三世、四世の中で、ある日突然自分は朝鮮人であることを知らされたという人々とはその訳が違うのである。毎日の日常の生活の中で、周りの日本人の社会と何かの異質を常に感じつつ成長していたと思われる。物心付いたときには、「朝鮮人」というものを考えないで生きていくことは有り得なかったと思われる。「朝鮮人」ということを考える時、何よりも先に彼の前に立ち塞がっていた者は、父親であった。その父親を通して「朝鮮人」なるものを形成していくことは当然のことであろう。李恢成にとって父親は、その「朝鮮人」としての認識を深めていく過程において

2) 金石範「いま、『在日』にとって『国籍』とは何か」（『世界』1998年10月号）

いい意味においても、悪い意味においても最大の影響力を与えた人物であることは間違いないと思われる。

李恢成の初期の自伝的な作品群にはその父親のことがいろいろと書かれている。そこに登場する父親は、「毎日酒を飲んで暴れ」「母が生きているときは母をぶっ」て「母がいなくなると長男に乱暴」する者であった。

「あんちゃん。早く逃げれっ！」

と炳午あんちゃんがわめく。スローモーション映画を見ているように父と重午あんちゃんが口を動かし、目を見張り、軀をずらしている。父の顔からじょじょに笑面がほどけ、ゆっくりゆっくり怒面がこみあげてくる。あんちゃんの顔はそれにつれ、しだいにしだいに青面となっていく。父のまなじりがあがり、その視線はゆっくり流しに向き直る。そこまでがじつに丹念に哲午の恐怖で見開かれたまなざしに映ってくる。

次の瞬間、哲午はハッとして流しに走っていった。そして何やら胸にかかえ込むと、けたたましく裏口から外へ飛び出していた。

哲午は夢中でそれを縁の下に押し込んだ。それでも不安で土をかけて埋めてしまうと、やっと人心地つき、その場にへたり込んでしまった。

〈ああ〉と哲午は心のなかでわめいた。〈とうとう、始まっちゃった〉

父は激昂すると見境いがつかなくなる性であった。いら立つと、ひどいときは包丁を振り回した³⁾。

僕らは悲鳴をあげた。父が畳をけたからだ。……翌日、僕らはおどおどして母の様子を見つめていた。父は徴用の仕事にでかけて部屋の中は母と僕らだけが残っていた。大きなマスクをつけた母の青ざめた顔の中で切りこみの深い目だけが異様に光っていた。昨日のいさかいの末、妻の唇を乱暴者の夫が裂いたのだ。病院で二針も縫わなくてはならなかった⁴⁾。

激昂すると包丁を振り回し、妻に二針も縫うような傷を負わせるほどの狂暴な父親の様子がこの二つの例文からよく窺える。このような父親に対する李恢成の感情は、少年時代には「父ほどおそろしい人はいない」と思い、高校時代には「鬼、鬼だ、父はまさしく鬼なのだ。死んでしまえ。殺してやりたいくらいだ。」と日記に記し、そ

3) 「またふたたびの道」(『またふたたびの道・砧をうつ女』講談社、1995年)

4) 「砧をうつ女」(前掲書)

して成長して行くにつれ、「父をおそろしいと感じなくなった反面、軽蔑するようになっていく」のである。

こういう部類の父親は、封建的、且つ家父長的考えを持つ、朝鮮の父親としてはそれほど珍しいものでもない。家庭の中で暴力によって君臨している父親像は韓国近代の小説の中ではごく普通に登場しているものである。そして、これまた特別に朝鮮だけの父親像でもなく、日本の庶民の父親像でもあったのである。小檜山博氏は、李恢成の父親のことにについて次のように述べている。

だが、この作品を読む者は、この父にたいして肉親に近い感情をもってしまう。

ぼくの父もまた会津から北海道へ出稼ぎにきて、当時のカネで千円ためたら故郷へ帰ろうと思いつつ、六人の子供ができてカネもためることができず北海道へ居ついてしまった。その苛立ちと悔しさで父は酒を飲んで母に薪や茶碗を投げつけ、研いだ出刃包丁を振りかざして母を殺してやると追い回していたのだった⁵⁾。

つまり、李恢成の父のような父親像は、朝鮮においても、日本においてもひと世代前の父親像としてはもの珍しいものではないのである。

しかし、李恢成にとってこの父は、父親としての意味合いだけにとどまるものではなく、この父親で代表される「朝鮮人」という意味合いまでも含むものであった。普通、自国に住む人間は、横暴な父親を持っていたとしても、そこから「朝鮮人」「日本人」のことまで発展していくことはない。個人的な個別のものとして考えるだろう。だが、周囲を日本人に囲まれ生活していた李恢成にとっては、この父親こそが周りの日本人に対して「朝鮮人」であったのである。

この「朝鮮人」は「政治談義がすきで」「世の中の仕組みの不平等さや差別について」「下手な日本語で」しきりに「日本人」に「ながながと談」じたり、そしてその晴れない鬱憤が募ると「アイゴ。このうらみをだれが晴らすやら！」と朝鮮語で呻くのであった。李恢成は、この父親の無気力な嘆きを聞くと「背筋が凍りつくほどいやな気」がし、父親の立場を「理解しようと努めながらも」「逃げ帰りたい気持ちに駆けられ」るのである。横暴で、恐ろしい父親でありながら、かつ不本意で留まっている日本での生活の不満や鬱憤を怒り散らしている父親でもあったのである。李恢成にとっては、この父親が即ち「朝鮮人」であり、自分自身またその「朝鮮人」なんだ、と思えたのであろう。父親で代表されるこの「朝鮮人」からは、「朝鮮人」としての自負心どころかむしろ劣等感を覚えるしかなかったのだらう。しかし、李恢成はこのい

5) 小檜山博「生き残り者の悲歌」(前掲書『またふたたびの道・砧をうつ女』)

やな「朝鮮人」から逃げて、周りに同化し、日本人になる道もなかった訳ではなかった。が、彼は、このいやな「朝鮮人」から逃げず、逆にこのいやな、劣等感の塊の「朝鮮人」なるものに本気でぶつかり、それを乗り越えていく道を選んでいる。それは彼の家庭が朝鮮の色調を持ち合わせていて、生まれてからその雰囲気の中で生活していたことで、自分は朝鮮人だという意識が無理なく自然に身についたことが大きく影響していたのではなかったのかと思われる。

ところが、「殺してやりたい」ほど憎み、「朝鮮人」としての劣等感を植え付けた張本人だと「軽蔑し」ていた父親像が変化していくのである。

李恢成は1994（平6）年に「百年の旅人たち」を発表している。樺太から引上げた朝鮮人一行が祖国朝鮮へ帰国するため、青森港に降り立ってから長崎の針尾島収容所へ辿り着くまでの道のりと、朝鮮の国内事情を考え、帰国を断念して日本にそのまま居残ることを決心するまでの——1947年7月27日（日）から8月9日（土）——二週間のことが描かれている。これも初期の自伝的作品同様、彼の樺太引き上げのことがその題材になっている。しかし、ここに描かれている父親、朴鳳石の人物像は初期の作品群とは大きな変貌を遂げている。

朴鳳石は虎のように吼え、息子に跳びかかろうとした。その背中を仁浩が必死になって羽がい締めにし、「兄ちゃん、外さ出てけ！」と叫んだ。珍浩が台所に飛びこんでいき、包丁をかかえて裏戸から消えた。高子がおびえる好子を抱きしめ、好子は泡を吹きはじめた。（略）その夜夕食のあとで、子供たちが床についてから、朴鳳石は電灯の下で長男と坐っていた。彼は手をあげたことをわびた⁶⁾。

この場面は、前掲の「またふたたびの道」の場面と同じ状況である。しかし、ここにはカッとなるものの後から理性を取り戻し、長男に「手を上げたことをわび」ている父親がいるのである。ところが、「またふたたびの道」からは子供に「手をあげたことをわび」るような父親の様子は微塵も覗えない。

「百年の旅人たち」の朴鳳石は、乱暴さ、粗暴さは持ち続けているものの、自分の行動、周囲を取り巻く状況などを判断するのに理性をもって、かたよることなく公平に考えていこうとする、思慮分別を備えた人物として登場している。

この変化は李恢成において何を意味するものであろうか。

初期の作品群において彼は父親のことを書く時、すべてのものに「父」と書いている。これは血のつながった肉親の父親であり、その父親に対する感情は、日常生活

6) 『百年の旅人たち』（新潮社、1994年）

の場において感じ取った生身のものをそのままぶつけているものであった。一方、「百年の旅人たち」では、父親のことを、「朴鳳石」「彼」としている。そして、語り手は、随時「朴鳳石」の心奥に入り、戦時中の協和会のこと、義妹や親族を樺太に置き去りにしたことなどを告白し、しきりに懺悔する「朴鳳石」の心情を語っている。ここには、父親を第三者の位置において、客観的に見つめ、歴史の狭間で不本意な人生を強いられた一人の「朝鮮人」として見ている李恢成があるのである。

李恢成の父親は昭和39年4月に亡くなっている。李恢成が「またふたびの道」で群像新人文学賞をもらって文壇に登場する前のことである。彼が書いている自伝的作品はすべて父親亡き後の作品である。それではこのように自分の父親を肉親の父から歴史的背景を背負う一人の「朝鮮人」として理解しようとするのはいつから始まったのだろうか。

長いこと、ぼくには父の背後にある不気味な坑道が何なのかよくわからなかった。その薄暗さは父の狂暴さを育てるけものの道に通じているようにうつっていた。そのため、父が腹を立てると、そこにどんな真実がこめられていようと、ぼくにはけもののことばとしてしか聞こえなかったのである。

この頃になって、その坑道に光がほのかに射しこんでくるように思われる。ひょっとして、自分が朝鮮人として父のことばを理解しようとしているせいかなと考えてみる⁷⁾。

これは父親が亡くなってから八年後に、父親のことを書いた「人面の大岩」(昭47)の一部である。いやで、恐ろしくて、軽蔑する父親の否定的な面だけではなく、どうしてそうならざるをえなかったのか、を考える余裕が見え、そこから歴史に振り回された一人の「朝鮮人」という視点を見出しているのである。けれども、まだこの作品の段階では「ほのかに」思えるものであった。それが、二十四年という歳月を経て甦った父親は、主体性を持って、歴史の動きと自分の行動を見極めて行こうとする一人の「朝鮮人」「朴鳳石」として「百年の旅人たち」に登場するのである。

李恢成は、在日朝鮮人一世の家庭で、自分は朝鮮人であることを承知の中で成長した。しかし、その家庭は、貧困であり、横暴な父親が君臨し、暗くて滅入るようなものであった。それ故に、この家庭、特にその父親は、彼の周囲を取り囲んでいる日本の社会、日本人と常に対比され、彼に一層根強く朝鮮、朝鮮人を意識させる存在であった。その意識が強くなればなるほど、彼はこの家庭、この父親で代表される「朝鮮

7) 「人面の大岩」(前掲書『またふたびの道・砧をうつ女』)

人」なるものに劣等感を覚えざるを得なかった。彼はこの「朝鮮人」としての劣等感を乗り越え、克服していく道として朝鮮総聯との関わりを持って、祖国探しの行動へと動き出していくのである。「百年の旅人たち」の「朴鳳石」は、李恢成が「朝鮮人」としての「民族的な矜持」を確保し、「朝鮮人」の立場から改めて歴史に弄ばれた一人の「朝鮮人」として父親を理解しはじめた、その表れだと思われる。

2. 「悔いのない」朝鮮人

李恢成の「朝鮮人になる」行動は、早稲田大学在学中の留学生運動に参加したのがその始まりで、それ以後、1967（昭42）年朝鮮新報社をやめるまでほぼ十年間続いている。この十年間彼は、自分の父親で代表される、「歎き疼く朝鮮人」、「古い朝鮮人」を乗り越えるために必死で行動していたと思われる。その行動とは、自分の祖国なるものを探し求めるものであった。自分の祖国を北朝鮮、即ち朝鮮民主主義人民共和国と思い、その祖国への熱烈な憧憬を持ちつつ、その祖国へ一直線に向って行った時期である。

その頃から彼に誘われ相俊は在日朝鮮留学生同盟に出入りするようになった。相俊の生活にあきらかな変化が起っていたのだ。留学生だって？ はじめ相俊は「留学生」という言葉に違和感を抱かされた。なぜ、このおれが留学生になるのだろう？ 朴楚は笑って言ったものだった。「たしかに日本で生まれて育った俺達にしてみれば、この『留学生』って言葉はピンとこないさ。けど、俺達にゃ帰るべき祖国があるじゃないか。帰るってのははっきり、いまは留学しているってことだよ。だから、俺達は留学生ってことになる」（略）

「どうも留学生って実感が乏しいのは、それだけ俺達が気持の上で富士山を見て暮らしていて白頭山を見つめていなかったせいだと思うんだな。これはやはり主体性の問題だよ」

そんな会話を朴楚とかわしたのは有益であった。相俊はこの数ヶ月のうちに自分の内部でじょじょに芽ぶいてくるものを感じていた。昨年の春にS市の友達と会ったとき、メルクマークを持たねばといった友人がいたのをおぼえている。その指標が見つかったような気持であった。「白頭山」とはうまい比喻だと相俊は思う。（略）

いまの相俊は自分がとにかく動き出しているのを感じていた。ふとその自分にパーティにでも出るときのような物腰の軽さを意識しないでもなかったが、とに

かく一步をめぐめて動き出した実感があるのである⁸⁾。

「伽倻子のために」(’70.9)の主人公相俊が、祖国というものに初めて真正面から向かい会った時の気持ちがよく読み取れるところである。李恢成のそれと重ねて読んでもさほど差支えはないだろう。帰属可能な祖国の存在を発見し、自分の内面が動き、それに向っていけそうな「指標」が見つかり、とにかく一步を踏み出したのである。その気持ちは「パーティにでも出るときのような物腰の軽さ」であったのである。

祖国を見つけた彼にとって目指すものは、父親に代表される「朝鮮人であっても挫折感を持った人間」になるのではなく、「社会的な差別を受けたとしても、そのために自らの存在を疎外しない」で、朝鮮人として生き、「誇らしい」「悔いのない」朝鮮人になることであった。そして、将来も「これから育つ世代に朝鮮人としての誇りを与える仕事に挺身し」たいと願うようになった。

大学を卒業すると、哲午は民族学校で文学の先生をしようと思っていた。在日朝鮮人にとって祖国とは何なのか。朝鮮人とは、日本人とは何なのか——哲午は自分の生い立ちのなかから渦巻いてくるそうしたものへの限りない訴求を仕事にぶつけていきたくかった⁹⁾。

実際、李恢成が就職したのは、朝鮮総聯中央教育部学生課である。

この時期の李恢成の北朝鮮に対する感情は、当然のことであるが、熱烈なものであった。社会主義建設をしている北朝鮮の放送を聞くと、「鋌を打ちつけるような力づよいことばやはげしく謳いあげる歌」を「いいなあ」と思ったのである。また、在日朝鮮人の帰国問題やサハリンに残されている朝鮮人の帰国問題に関しても、

同じ屋根の下で単一民族が暮すために共和国がとっている一貫した政策がかならず樺太、いやサハリンにいる同胞達にも光を与えることになるのだ¹⁰⁾。
と絶大な信頼をもって北朝鮮、即ち祖国を見つめているのである。

このように、烈しく朝鮮人になることを願っている彼であるが、願えば願うほど自分自身が「半チョッパリ」であることを認めざるを得なくなるのである。父親に反発して「無視していた朝鮮語」が彼にとって今は「切実なもの」になってきているのである。

やっと朝鮮人としての一步を踏み出してまだ日が浅い。大学を出たといっても

8) 『伽倻子のために』(新潮社、1994年)

9) 「またふたたびの道」(前掲書)

10) 注9)と同じ

朝鮮人としての教養のない自分はこの七、八年仕事や同胞との接触のなかで冷汗をかくことが多かった。ときには国語をあまり知らないという一事のため、冷汗ものの経験をしたこともあった¹¹⁾。

朝鮮人ではあっても、日本の社会において、日本の学校教育を受けた彼が、朝鮮人になるために費やした努力は並大抵のものではなかったと思われる。しかし、彼の祖国への憧憬、熱い羨望がこういう困難を苦勞ともつらいとも思わせなかったのだろう。社会主義の国を建設している自分の祖国、そこは、在日朝鮮人はもちろんのこときっと「サハリンにいる同胞達にも光を与え」てくれる、明るく希望が満ちたところであった。彼はこの祖国へ自分のすべてを注ぎ、一心不乱に邁進していったのである。

ところが、その李恢成が、1967（昭42）年勤めていた朝鮮新報社を辞めるのである。表向きの理由は「小説が書きたい」ので自由になる時間を作るということであった。しかし、朝鮮総聯という組織は、各自の担当部署を「党から委任された哨所」と言うほどのところなので、彼が職場を辞めたことは政治的な意味合いを含まない個人的な問題として済まされるものではなかったろう。実際に李恢成自身も「組織の中樞で起りつつあった不吉な傾向を目撃し、自分の内部にそうした事態への疑問をつのらせる」うちにその職場を辞めることを決めている。つまり、ここには李恢成の、朝鮮総聯の組織に対するある種の見方の変化が生じていることは確かである。その時期の李恢成の見解、立場なるものを「約束の土地」を通して見てみることにする。「約束の土地」（'73.4）は彼が組織を辞めて五年後に書かれたものである。

主人公、重吉の妻、道子が真夜中に「乳房をメスで切開されているようなくるしげな声」でうなる。それを聞く重吉は「窒息しそうな気分」になるという切りつめられた状況からこの作品は始まるのである。五年前組織を辞めた重吉の家族の不安や恐怖が至る所に顔を出している。組織に戻ることを強いる人々、道子に重吉と別れることを暗に匂わせる人々、「家族達の祖国観の微妙な違いが照らし出され」お互いが違和感を覚える。このように重吉の家族が抱えている内面的事情と、松本浩萬とその借家をめぐる奇妙な事件とはお互いに響き合いながら、この作品のテーマの一つである不安や不気味さをますます増幅させているのである。

国籍をはっきりさせぬ松本浩萬氏というバルザックごのみのキャラクター。作家である重吉と妻の道子、こどもふたりで構成される家族。松本の世話になる、

11) 「またふたたびの道」（前掲書）

家主不明の借家は、小説の舞台としてきわめて象徴的だ。赤緑色盲症のこども、六本指の赤ん坊という、小さな道具のイメージも、日本人社会ではいつ流されるかもしれぬ根なし草のような生きざまをしいられつつある人間の不安をあざやかに定着している¹²⁾。

中里氏の指摘通り、帰属すべき場所をなくし、進んでいく方向を定めていない主人公重吉の不安がこういう象徴的なものを通してうまく表現されている。

李恢成は「約束の土地」について次のように述べている。

この作品を書くのに、私はさまざまな意味で勇気を要した。これしきのことで、眠られぬおもいをかさねたのであるが、それはテーマが祖国南北朝鮮の今日的状況にかかわり、そのことから自分自身のありようが問われていたからである¹³⁾。

「自分自身のありようが問われ」ることを十分に承知の上での執筆であった。「眠られぬおもい」を重ねた彼の苦痛は余るほど分るような気がする。祖国を思うが故に自分のすべてを注いできた朝鮮総聯をどういう理由であれ、離れることになったことは、今まで下ろしてきた彼の根、それ自体を揺さぶるものであったと思われる。しかし、ここで明確にしておきたいものは、李恢成が朝鮮総聯という組織からは離れたとしても、まだここでは、祖国（北朝鮮）それ自体を否定していたわけではないということである。「斃死するよりも、祖国喪失者になることの方が一層こわい」と思ったり、「僕は組織とは無関係でも同胞からは離れないぞ」と叫ぶ「約束の土地」の重吉の気持ちは、即ち李恢成の気持ちそのものであったろう。

北朝鮮を自分の祖国なるものと信じ、邁進した李恢成は、朝鮮総聯を離れることでもう一度自分の立場、自分が目指すものを見詰め直さなければならない状況に陥っていくのである。

3. 「在日朝鮮人」という立場の発見

「悔いのない朝鮮人」になる、「民族の矜持を持つ朝鮮人」になることを目指し、朝鮮総聯で働いた李恢成の考えは、彼が携わった留学生運動が示すように、その基本は自分の祖国即ち北朝鮮を帰属すべき基点として、祖国の社会主義国家建設が達成でき

12) 中里喜昭「解説」（講談社文庫『約束の土地』1977年）

13) 李恢成「あとがき」（前掲書）

るまで在日朝鮮人として自分の役割を担っていくことであったと思われる。しかし、朝鮮総聯の組織をやめた李恢成は、彼自身の思いとは裏腹に、帰属すべき祖国は遠くなり、彼自身立つべき場所も明確ではなくなっていた。その時、彼の内心から溢れ出る要求は小説を書きたいというものであった。

在日朝鮮人の生活史を二世の眼で書いてみたいといふ衝動に駆られていた。父親が死んだという出来事も、どこかでその気持を突きあげている。その説明は上手く伝えることのできぬもどかしさをいつも重吉にあたえるものだった¹⁴⁾。

このような気持ちをもった李恢成が、「二世の眼」で在日朝鮮人の生活史を書いたのが、自分の生い立ちや両親、家族のことを書いた初期の作品群である。今まで見てきたように、そこには父親や貧困な家庭によって植え付けられた朝鮮人として劣等感乗り越えて、「誇らしい朝鮮人」を目指して熱烈な気持ちで祖国と向かい合っている主人公が登場していることが分った。

しかし、朝鮮総聯をやめた彼にとっては、この向かい合っていた祖国ともずれが生じ、自分の主体性の立脚点をどこで求めるか模索しなければならなくなる。李恢成は朝鮮総聯をやめた後、二回（1970年10月と1972年6月）韓国を訪問する。この二回の韓国の訪問が彼に与えた影響は至大なものであることは間違いない。

それでは彼にとって韓国とは何物であったのか。

重吉は殺菌のしていない動物、疱瘡の注射をしていない赤ん坊、おろしたばかりのガーゼであった。そして、重吉はその漂動感をこらえて街角に立ちながら、自分の中の異邦人意識と決闘をつづけていた。日本人の情婦のような異邦人意識。その曖昧な感性を南の土地で打ち払い、受験生の祈りにも似て、ここを祖国の南の土地と感じなければ、もはや絶望しか残らないと思ひこむ瞬間があった¹⁵⁾。

「約束の土地」の重吉の、最初韓国を訪れた時の気持ちである。何かしっくりこない感覚のずれを感じながらも、「ここを祖国の南の土地」であると感じようとする気持ちの必死さが伝わって来る。

重吉は彼の幅ひろい教養が、いったん北朝鮮への理解とか社会主義思想の把握にいたるとまったく貧寒としているのに気づかされた。(略)

しかし、重吉は自分の考え方も知らず知らず教条化していたのに気づかされ

14) 『約束の土地』（講談社、1977年）

15) 前掲書

た。南の土地を政治のメガフォンを通して眺めてきた習慣をふと自分の観察に感じる。それは南の人々を救援する、といった高所からの発想にもある。南の人々を反動と愛国者にただちに二分してしまいがちな思考にもある。そのような思考パターンだけでは、南の人々を内部からとらえ、そこから幅ひろい同胞愛を甦らすのはむずかしいを感じる¹⁶⁾。

韓国で重吉を案内してくれた「彼」が、北朝鮮に関しては「彼」が持ち合わせた幅ひろい教養とは全く無関係に、無知と無理解を示していることを知る。そして、李恢成自身も今まで南の土地をどういう立場で、どのように見てきたのか、ということに気付かされる。祖国というものを考え直さなければならなかった李恢成にとって、この韓国訪問は以後の彼の考えに至大な影響を及ぼしたのである。

この時期の李恢成の作品に、韓国を舞台にしている長編小説「見果てぬ夢」がある。これも彼の韓国訪問から得られた作品であることには間違いない。この「見果てぬ夢」は、韓国の独裁政権下で、「自生的社会主義」による統一国家の樹立を目指して闘っている若者が登場する。北朝鮮の体制による統一でも、南の韓国の体制による統一でもない、独自の、自生の、土着の社会主義による統一を李恢成はこの「見果てぬ夢」において見せている。ここで考えて見たいのは、彼自身、この作品をどういう立場で書いているのか、ということである。

「見果てぬ夢」という作品は、そのような在日朝鮮人の立場を意識した作家の精神によって成立している作品である。そのことをいわなければならない。それはどういうことかといえば在日朝鮮人という、北でもなければ南でもない、という独自の主体の成立し得る場の発見ということである¹⁷⁾。

三木卓氏は、このように李恢成が「見果てぬ夢」が書けたのは、「在日朝鮮人」という立場を発見できたから成立したものだと見ている。

在日朝鮮人作家というものの位置づけを、日本との関係よりも祖国——望郷対象としての観念的な「剝製の」祖国ではなく五千万同胞によって構成される現実の祖国——との関係に力点を置いて把えなおしてみる視点を獲得したことが、彼の訪韓体験の核心ではなかったらうかと私は考えている¹⁸⁾。

一方、松崎晴夫氏は「見果てぬ夢」は、肌と実感で感じられる「現実の祖国」の発見から成立したものだと述べている。

16) 注14)と同じ

17) 三木卓「自由と勇氣——李恢成「見果てぬ夢」を読む」(『文芸』1979年11月号)

18) 松崎晴夫「七〇年代の李恢成と『見果てぬ夢』」(『民主文学』1979年11月号)

三木氏と松崎氏の見解は、李恢成がこの時期に立っていた位置を考える時、微妙な違いを見せていると思われる。つまり、三木氏の見解になると、李恢成は北朝鮮にも、南の韓国にも偏らない、「在日」という立場において自分の主体性を確立していかうとするところにその立脚点を置いている、ということになる。ところが、松崎氏の見解によると、今まで帰らないで望んでいた「観念的な祖国」というものが、韓国の訪問によって「現実の祖国」として感じ取れるようになったことになる。つまり、自分がこの祖国と血のつながった朝鮮人であり、自分の帰属すべき祖国だと改めて認識したことになる。言い換えれば、朝鮮人たるものへの確実な確認と言えるだろうか。この松崎氏の見解は、私は心情的な面から言うなら最もだと思う。上で上げた「約束の土地」からも韓国を祖国として受け入れようとする切実な気持ちからも言えると思うのである。しかし、彼の受け入れようとする祖国は朴大統領の独裁政治体制下の韓国ではないのである。

要するに自分の国家観をいえば、統一国家しか認めないという視点に立とうとしているわけですよ。絶対的な理念においてぼくはそういうふうに志向するわけです。しかし、相対的には北に政権があり、南に政権があるということを現実の問題として認めている。そしてその場合、朝鮮人の統一国家のイメージを育てていくさまざまな提案がされて、そしてそれがどちらからなされたものであれ、統一国家を育てていく上で意味あるものを積極的に支持していくという姿勢をぼくは取ろうとしているわけです¹⁹⁾。

朝鮮総聯を辞めた李恢成の視野には、今までとは感情的に違う形として韓国というものが、もう一つの祖国として入ってきた。北には距離を置き、南にはもう一つの祖国としての愛着を持ち、それとって両方の政権を認めているわけではない。彼の祖国なるものは、統一国家の朝鮮半島である。つまり、この時期の李恢成は、今は存在しない統一された祖国というところに祖国像を置き、現実のいま立っているところは、北でも、南でもない「在日」というところを自分の立脚点としていると言えるのである。つまり、李恢成は、北にも、南にも距離を置いた、「在日朝鮮人」という立場を確保することで、統一された祖国像への自分の夢を走らせることが可能になったのである。

19) 「文学者と祖国」(『群像』1972年3月号)

4. 「流域の朝鮮人」という視点

李恢成は1972年6月、二回目の韓国訪問をしてからも朴独裁政権に対して批判を続けていたので、韓国政府はこれ以上の入国は拒んできた。1995年11月、三回目の韓国入国が実現するまで23年間彼は南の地を踏むことが出来なかった。もちろん北の地を踏むことも不可能であった。即ち、李恢成は祖国でありながら北へも、南へも入ることが出来ない状況が23年間続いたのである。その間、李恢成は自分とおなじく朝鮮半島の周辺に、祖国から流され、散らばって生きている朝鮮人を訪ね歩いていたのである。

1981年10月、李恢成は彼の生まれ故郷であるサハリンを、引き揚げてから初めて訪れたのである。この旅は、祖国から流され、異国の地で生きている朝鮮人を彼が精神的に訪ね歩く、最初の旅であった。その後、彼はサハリンを先頭に、カザフ共和国、ウズベク共和国、そして西ドイツまで足を伸ばして行くのであった。

それでは、李恢成はこれらの旅を通して何を求め、何を見ていたのであろうか。

- (1) 昨日、私は、彼の意外な一面を発見した。チョホフ市の南沢河畔でみんなが愉快地遊んだとき、ハン氏が、酔いにまかせて「肩踊り」をはじめたのだ。両手を前後にのばしてしならせ、両肩を上下にリズムカルに揺ぶり、両脚をたくみに合わせながら。どうして、なかなか堂に入ったものだ。私は思わず、「チョッタ（すばらしい）！」と叫んで、いっしょに踊りはじめた²⁰⁾。
- (2) このひとびとと対面していると、親しいふんいきがどこからともなくただよってくるようであった。それは、もしかすると、共通している根づよい民族的感情のせいだったかも知れない。このジャーナリストたちは、国籍はソ連籍であった。一方、私はというと、朝鮮籍である。この国籍上の違いは、否応のないお互いの生いたちや環境のせいでのようになったものであるけれど、それにもかかわらず、民族的感情は基底に流れ合っているはずであった²¹⁾。
- (3) なんとか西ドイツに行くようになった春洙は、そのつどそこで「韓国」を発見した。そこは、韓国そのものではなくてもまさしく「韓国」であった。ドイツにいくことで、「韓国」を体験することができた。南の祖国に入ることをその

20) 『サハリンへの旅』（講談社、1989年）

21) 前掲書

政府によってはばまれている春洙にとってそれはこの上なく貴重な体験であった。シンポジウムに参加した彼らは春洙のへたくそなはなしに耳を傾けてくれた。だが、そこに出席することでほんとうに有益だったのはむしろ自分の方だったのだ²²⁾。

(1) と (2) は「サハリンへの旅」(1983.5) から、(3) は「流域へ」(1992.4) からの引用のものである。(1) のハン氏とは、李恢成にサハリンを案内してくれた人で、血筋は朝鮮人である。だが、「モスクヴァ大学」を卒業し、ソ連国籍をもつソ連共産党員であり、しばしば「わが党は——」ということばを繰り返す者であった。その彼が酒が入り、興ずると「両肩を上下にリズムカルに揺ぶり、両脚をたくみに合わせながら」朝鮮の踊りを踊っているのだ。微塵もその素振りを見せていなかったハン氏から朝鮮人の素性を発見した時、「思わず『チョッタ (すばらしい) !』と叫ぶ李恢成である。(2) は「レーニンへの道」新聞社のスタッフとテーブル越に向かい合っている場面である。「生い立ちや環境」のせいで国籍は違うが、この「サハリンの朝鮮人」と自分は「共通している民族的感情」が「基底に流れ合っているはず」だと同胞としての「親し」さを感じ取ろうとしている。(3) には、西ドイツにいる韓国の反政府側の政治亡命者達との交わりから「韓国の息吹き、生活の匂い」を感じ、「韓国を発見」し「韓国を体験」出来たことへの感慨が溢れている。

このように李恢成はどこで、どういう状況下で生きている朝鮮人であっても「共通した根づよい民族的感情」がその基底に流れているが故に、その人々との間では同胞としての「民族的同一性」を確認することができると信じ、またそれが確認出来たとき、彼は非常な歓びを感じていることが分かる。

しかし、現実はそのようなものではなかった。李恢成は流域に住んでいる朝鮮人に会うことで、「民族的同一性」を阻む様々な問題を内包している現状を見せつけられたのである。まずは、朝鮮人と現地民との混血の問題である。

歳月は、私に新たな一族の誕生を告げてくれた。いや、歳月というより、それは歴史というものであろう。サハリン島をめぐるはげしい歴史は私の一族をちりちりばらばらにしたが、それは崩壊だけをもたらしたわけではなく、新しい人間関係の誕生をも告げてくれていた。私たちは、もはや黒い髪だけをもつ一族ではなくなっていた。それは、孤立無援に陥ったこの地の一族が生き残っていくために、結局受け入れなければならない現実がもたらしたものとといえるのかもしれない

22) 『流域へ』(講談社、1992年)

い。が、どうあれ、混血のこの新しい世代を私は一族のひとりとして抱擁したい気持ちになっていた²³⁾。

サハリンに残ったいとこや親戚達の中には、ソ連人やアイヌと結婚した者もいる。「碧い眼の姪」にも会う。「受け入れなければならない現実がもたらした」ものとして自分の「一族のひとりとして抱擁」したい気持ちになったということは、彼が固執してきた「民族的同一性」とはどのように関わることになるのだろうか。「同じ屋根の下で単一民族が暮らす」云々と言っていた彼の初期の作品とはかなりの隔たりを見せている。

次は、国籍の問題である。

私は、義姉夫婦が朝鮮国籍を所持していることをそのときに知った。そして、親子関係においても、娘のスンクン夫婦のほうは「ソ連国籍」を取得しているという複雑な関係が存在していることから、はからずもサハリン在住朝鮮人の実情を私は身内をつうじて垣間見ることになった。祖母にしても国籍が「朝鮮」籍なので、ユージノ・サハリンスクからホルムスクに来るときに当局の許可証をもらって来ている。けれども「ソ連国籍」のフミ子の場合はそうしたわずらわしい手続きを必要としない。こうした「国籍」の違いが生活上の便宜の落差につらなり、またそれが物の見方における微妙なちがいをも惹き起しているのであろうか²⁴⁾。

親子関係でありながらもそれぞれ自分の事情や都合により、「朝鮮籍」なり「ソ連籍」なりを持っている。そこから「物の見方における微妙なちがい」が現れる。それは李恢成の親戚の問題だけではなく、サハリンの朝鮮人全体の問題でもあった。

朴亨柱氏は、二度目の祖国訪問のあと、北朝鮮に幻滅を感じたらしかった。それからおよそ二年間、彼はまだ「朝鮮籍」を持っていたが、七四年ごろからは北朝鮮の公民権を更新しなくなり、今日では事実上の「無国籍」者となっていた。

これは、いずれは「ソ連国籍」をとるための冷却期間なのである²⁵⁾。

李恢成の親友を始め、多くのサハリンの朝鮮人は朝鮮の国籍を放棄してソ連の国籍を取得することを望んでいて、実際に着々とその方向に動いていることを目の前で見たのである。「伽倻子のために」では、伽倻子の父親の帰化問題に触れて「歳月は老人から朝鮮人としての誇りを麻痺させ、風化させ、帰化させようとしている」と述

23) 『サハリンへの旅』(前掲書)

24) 注23)と同じ

25) 注23)と同じ

べ、この伽倻子の父親に対して「腑甲斐ないとも痛ましいとも」思っていた李恢成であったが、その彼がこのサハリンの朝鮮人の朝鮮離れをどう考えていくことになるのだろうか。この時期李恢成は、朝鮮総聯の組織をやめていても自分の国籍は「朝鮮」だと「サハリンへの旅」で言っていることをも注意しておきたい。

三番目の問題は、古い世代の生活上の有利のための国籍放棄とは違って、若者の現地への心情的な同化である。

(1) 「サハリンを愛する気持があふれた詩だったわ。だから人気があるの」ナーシャのこの説明は、逆に私を驚かせた。だが私が驚いたのは、ここ数日ずっと私につきそってくれている詩人が、どうやら大学試験にも出るほど有名な人物であるということではなく、ナーシャの天真爛漫な反応ぶりにあった。この次女は、サハリン島の桂冠詩人をまるで自分の親しい人について話すようなしっくりした口振でいうのである。そして、おそらくこういう感覚なり感受性はこの地にはほぼ完全に順応している朝鮮人の若い世代にして初めて生まれてきているものであり、こうした現象はサハリンの朝鮮人一世の、同化を拒否する執拗な生き方とはまるで違うものなのだ²⁶⁾。

(2) かつての祖国である「朝鮮」は、もはや最も近い「外国」になり、国際連帯の最も身近な対象となっていた。こうした話し方には、かつての祖国である「朝鮮」への関心が感じとれたが、しかしこの教授が何よりも頭をつかっているのは「朝鮮」ではなく、明らかに「サハリン」なのであった。この「サハリン」における社会主義経済分野の発展のために、いかに自分が、どのように実質的な成果をあげるかが、この教授の日常の関心事なのである。そしてその成果によって彼は、家族の快適な生活を愉しんでもいた²⁷⁾。

(1) は、李恢成をサハリンで出迎えてくれた、サハリンの詩人ペロウソフ氏のことを聞いた李恢成の親友の朴亨柱氏の次女が示した、その詩人への反応である。この娘はサハリンの詩人、ペロウソフ氏と同じ感覚なり、感受性でサハリンを愛しているであろう。その感覚が李恢成には「驚く」ほどのものだった。

(2) は、サハリンの師範大学の朴寿鎬教授を訪問したときの感想である。祖国なる朝鮮は外国になり、サハリンそのものと一体になり、そのサハリンの社会主義経済分野のために努力しているという教授を見て、李恢成はその成果によって「家族の快適

26) 注23) と同じ

27) 注23) と同じ

な生活を愉しんでもいる」と皮肉っているのである。

李恢成は朝鮮半島から流された朝鮮人が住んでいるところを「流域」と言っている。この言葉には地理的なものでの流域だけではなく、精神的な面での流域をも意味するものだと思われる。

李恢成は80年代、流域の朝鮮人を訪ね歩きながら、彼が今まで「固執しつづけてき」た「民族的同一性」を確認し、同じ同胞としての連帯感を感じたことも確かであった。しかし、その一方「民族的同一性」の確認を妨げる様々な要因が流域に住む朝鮮人の社会にはあることをも明確に分かったのである。そして、その現状は日本に住む「在日朝鮮人」の問題と同じものであることにも気が付いた。

彼がこの流域を旅することで得た一つの収穫は「在日朝鮮人」も即ち「流域朝鮮人」の一つだというものではないだろうか。今まで李恢成は「在日朝鮮人」と祖国を一対一で考えてきた。その彼が流域の朝鮮人との出会いを通じて、その人々が「在日朝鮮人」と同じ境遇のもとで、同じ問題を抱えて、同じく悩んでいるということを見たのである。すると、今まで〈祖国〉と〈在日朝鮮人〉という意識からすべてのものを見ていたことから、「在日朝鮮人」の問題というより「流域朝鮮人」と〈祖国〉という意識のもとですべてのものが見えて来る。それは、〈祖国〉との関係はもちろんのこと、「在日」の問題をも今までとは違う角度から眺めることを可能にしてくれるものになったと思われる。

「祖国」で知るべき歓びをこの「外国」でしか味わえぬというのは理不尽ではないか。そう考えていくと、ここは流域だった。ひとびとは流域にありながら歴史のおもみに耐え、そのときどきの人間の友情や記憶をここに温めながら生きているのだ。人間の市のたくましい現実の中に自分はまぎれ込んでいるのだ²⁸⁾。

祖国には帰れない李恢成は、外国において祖国を味わい、民族の意味を考えた。そして、振り返って見ると、

自分が暮らしている日本もまた「外国」だった。それなのに、「在日」という基軸からすれば、この観念が希薄になるときがあった。それは説明すべからざるものだ。この数年とみに春洙はこのことの意味を考えることがおこった²⁹⁾。

日本も祖国、朝鮮半島に対する外国、つまり紛れもない流域なのである。この「流

28) 『流域へ』(前掲書)

29) 注28)と同じ

域朝鮮人」という視点の確保は、李恢成をして、今まで自分が「固執しつづけてきた」「民族的同一性」をもっと広い意味において追求していくべき必然性を与えたと思われるのである。

5. 新たなアイデンティティの確立

李恢成は1995年11月三日目の韓国の入国が許され、23年ぶりに南の地を踏んでいる。そしてその時のことを題材にした作品「死者と生者の市」(96.5)を世に出した。この作品には、「4.」で述べた、李恢成が流域の朝鮮人を知ったことで考えざるを得なかった問題に対する答えが至る所から読み取れる。

まず、国籍の問題から見てみよう。李恢成自身の国籍問題と在日朝鮮人の帰化の問題に分けて考えて見る。

流域の朝鮮人を訪ねる最初の旅であったサハリンへ行った時の彼は、自分の国籍を明確に「朝鮮」だと言っている。自分が旅券を持参していないのは「日本政府が朝鮮民主主義人民共和国とのあいだに国交を開いていない」からで、そういう自分は「無国籍者のような気分」に陥ってしまうのだと「サハリンへの旅」では言っている。この時点での李恢成は、朝鮮総聯からは離れていても自分の国籍は朝鮮即ち朝鮮民主主義人民共和国であると認識しているのである。これが「死者と生者の市」の主人公文錫は、新聞記者の「朝鮮国籍」という言葉に対して「正確ではない」、「朝鮮籍」なのだとか心の中で思っている。つまり、「朝鮮国籍」は朝鮮民主主義人民共和国の国籍である。しかし「朝鮮籍」とは、「分断以前の『朝鮮』という世に現在もしない国号」で、「今では『記号』でしかない」ものであるが、自分はこの分断前の「朝鮮籍」なのだという立場からの「正確ではない」と思うのである。「サハリンへの旅」と同じ「朝鮮」という言葉は使っていてもこの違いはかなりのものである。それに文錫は自分のことを「朝鮮籍をもつ無国籍者」だと何度も主張している。「サハリンへの旅」での「無国籍者のような」者ではなく「無国籍者」になっているのである。

この「無国籍者」という概念は「サハリンへの旅」では、朝鮮国籍をもつ朝鮮人がソ連国籍を取得するために通過する一つの段階としては使われていたことは「4.」で述べた。すると、この「無国籍者」を名乗る文錫には、次の段階、つまり韓国の国籍を取る準備段階という意識があったのだろうか。

「現場」の人間ではないからだ。自分は「朝鮮」籍の人間であり、「臨時旅行証明書」をもってやってきた。「外部」の人間にすぎない。おのずと限界があった。

「現場」の人間になればべつかもしれないが。昨日、高遠が真心をこめて忠告していたのが頭をよぎった。国籍を変えれば、「内部」の人間としてうごきまわれるのか³⁰⁾。

このように文錫は、国籍を変えて、「外部」の人間から「内部」の人間になることをも考えている。それでは、この文錫をそうさせる思想的根拠はどこから来ているのか。

サハリンや沿海州、中央アジアに旅してから民族とは何かを考えるようになった。自分の身内に異民族の血がまじっているのを否応なしに知り、そこから変るべくして変っていった。サハリンでは、アイヌの血筋をもつ姪と会い、夫を自動車事故で失ったばかりの彼女の不幸を聞かねばならなかった。ロシア人の血が混った甥や姪、日本人の血がかよっている甥や姪の生きる姿に触れてきた。どこにいても、一族はおおきな変容をとげていた。一族の数珠がさまざまな彩りをおび、賑やかな音を立ててさんざめいているのだった。一族のこうした新しい変化は、古い民族意識からの脱皮を文錫に強く迫っていた。自分の民族観が開かれていくのはまさに足許ののびきならぬこうした事情からであった。「在日」のだけかれなく、そんなときにそうなっていくように。海外同胞五百万が、おなじ人生の光と影をおびている存在であるように。もし、こういう群像が祝福される存在でなければ、民族なぞいったい何の意味があるのだろうか³¹⁾。

「4.」でも指摘したように李恢成の初期の作品には北も南も祖国として認めたとしても、その民族は「単一民族」としての概念の中でのものであった。しかし、流域の朝鮮人を訪ね歩くうち、「碧い眼の姪」にも会った。かれはこの混血の親族をも「一族として抱きしめたい」気持ちになった。しかし、「異民族の血が混ざっ」た者をも同じ民族として抱きかかえるには、「単一民族」という概念は大きな壁である。李恢成はこの「古い民族意識」が「国の為政者が好む歴史上の虚構」であることに気付く、実際の朝鮮民族は「古代から攻め続けられてきた民族」で、「征服者や侵犯者の血を一滴も受けずに純血を保ってきた」はずがない。むしろ「征服者の血を受け入れ、抱きかかえながらもけっして同化されることなく生きのびてきた民族」である。だから、五百万の海外同胞はもちろんのこと、異民族の血が混った者をも祝福し、懷に抱きかかえなければならない。こういう「汎民族的な同胞愛」に基づく民族の概念

30) 『死者と生者の市』(文芸春秋、1996年)

31) 前掲書

のもとで「民族的同一性」を求めなければならない。これこそが、流域に生きる朝鮮人と朝鮮半島、即ち祖国に生きる朝鮮人を「民族的同一性」につなげる何よりの基本的立場になる。

このような、すべてを抱きかかえる新たな民族の概念に立って、世界中に散らばっている朝鮮人を見れば、そこにはもはや何国籍を所持しているのか、というものはそれほど意味をもつものではなくなってしまうのであろう。

そのときになって文錫には、国籍というものの正体がおぼろげにでも見えてきたように思った。どんな国籍を持つにせよ、人間とは多重性をおびた存在である、そうであるかぎり、どんな生き方をするかの選択こそが人間としての最後の問題なのだった³²⁾。

「どんな国籍」を持つにせよ大事なのは「どんな生き方をするか」にあるという考えに至って来る。ここまで来ると、国籍の変更というものは、自分の生き方を活かせるための一つの手段として、自由に選択していいもの、という思想的背景が整うのである。こういう考えに立つと、自分自身の国籍変更はもちろんのこと他の人々の帰化の問題も同じ線上で、認めることになるのである。「死者と生者の市」では、在日朝鮮人の帰化のことについて『帰化』しても『同化』はせず、新しい生き方をすればいい」と思い、ドイツの国籍を取得した音楽家尹伊桑に対しても「二つの祖国をもつ人間になったとして、それを誰がけなせる」か、と言う見方を示している。

このように、李恢成は「死者と生者の市」において大きな思想的発展を成し遂げている。それは、朝鮮民族の民族の概念を、閉鎖的な「単一民族」ということから抜け出て、いかなる異民族の血が混ざったとしても、その者をも含む民族、という新たな朝鮮民族の概念を産み出したのである。

そして、李恢成はこの新たな概念の民族という所に自分の立脚点を置き、「民族に所属しながら、それをこえる世界をもとめている存在」として自分自身を確立していたと思われる。このような明確な思想的論理を樹立させた彼にとってはもはやどの国の国籍を所持するかは重要な問題ではなくなっているのである。彼の思想を推進していくのに、手段としてもっとも近い道の一つを選択する、という程度のものとして思っているのではないだろうか。

32) 注30)と同じ

6. 結 び に

李恢成が自分の人生をかけてこだわってきた両祖国との関係、それに伴う国籍問題を、韓国の国籍を取得することであっさりとその幕を下ろしたように見える。その事実だけを切り出すと意外な展開と思われるかも知れない。ここで、李恢成の辿ってきた思想的背景をもう一度照らし合わせて見ると、それは彼が彼なりの思想的背景の中で自分の道を歩いた、その結果であることが分かった。

李恢成は、まず隠れ朝鮮人から朝鮮民主主義人民共和国に帰属する朝鮮人になった。そして、次は存在しない統一国家としての朝鮮を自分が帰属すべき所と思った。さらにその次に彼は、どんな異民族の血が混ざった者をも抱きかかえる「広大な朝鮮民族」を考え、そこに自分を帰属させている。

李恢成は朝鮮民族を見つめ考えてきた。その見るもの考えるものが、歳月がたつにつれ複雑になり、広大な範囲に及ぶようになった。その都度彼は、それらをすべて統括するもう一つ上のレベルに自分の思想を発展させて行った。今現在李恢成は、世界中に散らばっている朝鮮民族、そしてその現地民との混血によって生まれた者をも朝鮮民族として認識し、その広大な朝鮮民族の概念において「民族的統一性」を求めて行こうとしている。これは結果的にはほぼコスモポリタンに近いものである。

李恢成は、自分が帰属すべきところ、即ち自分をアイデンティファイできるところをこういう壮大なものにしている。そこから国籍の問題を考えると、どの国の国籍を持っても大して違うものでもないということに気付くのは当然の成り行きのように思われる。彼にとって国籍は、彼の思想を推進していくために選択する道の一つに過ぎないものであろう。